

## パネルトーク

田中 優子×橋谷 能理子×原島 博 (コーディネーター)

### ■「連」にはいいヒントがたくさん詰まっている

**原島** 田中先生、どうもありがとうございます。江戸時代の話でしたが、なんだか、未来の話のように思いながらお聴きしました。ここからはパネルトークということなので、橋谷能理子さんに来ていただいております。今日は会場から質問を受ける時間が取れませんので、橋谷さんにはキャスターとしてではなく一人の女性として、会場の方はこんなことを考えているのではということをおっしゃっていただければと思います。橋谷さんはキャスター、主婦、そして一児の母ですね。一児といっても、お子さんは大学生とか。

**橋谷** もう大学生で大きくなってしまいました。

**原島** 過去2回のシンポジウムは男性二人と女性一人でしたので安心だったのですが、今日は、女性二人に男性一人。だいたい家族の話をするとう男性が悪いという話で終わりがちなので、今日はもう少し広い立場で議論をお願いできればと思います。まずは橋谷さん、今の田中優子先生のお話をお聴きして感じたことをお話いただければと思います。

**橋谷** はい、お話を伺いながら、激しく何度もうなずいてしまいました。先生がおっしゃっていた江戸時代の血縁ではないコミュニティが、どんどん血縁の核家族という小さなかたまりになっていって、その弊害が極限に来ているような気がするんですね。たとえば育児に関して言うと、ワンオペ育児という、お母さんがとにかく一人で全部背負って、自分のキャリアも投げ出して、保育園に入れなかったら悩んで、職場にも戻れない。そういう例をたくさん見てきているので、もう血縁だけの核家族でなんとかなる時代ではないと、すごく感じています。では何がそれにとって代わるのかといったとき、なるほどと激しくうなずいたのが、連という血縁ではないコミュニティ。これをぜひ現実化していただきたいと思います。すごくいいヒントがたくさん詰まっている気がします。

**原島** 実は第2回の山極先生のときも、まさに同じ話でした。今日、最初に少しお話ししましたが、人類はまさに連をつくってきた。直立二足歩行を始めたときから子育てもみんなと一緒にしない、一緒に生き延びてきたというお話だったのですが、それが少なくとも江戸時代までは続いていたということなんですよ。

**田中** そうですね。たとえば商家には、お手伝いさんや子守さんのような他人がいっぱいいます。すると、その家で子育てが行なわれている場合、お母さんだけではなく、いろいろな人が子どもの面倒を見られるんですね。農家も当然同じで、近所の方がいますよね。長屋は、もっとそうです。わたしは長屋の出身なのでよくわかるのですが、小さい頃に祖母や両親が留守のときにおなかをすかせたら、隣に行くだけです。すると隣のおばさんが「おなかすいてるのね。じゃ、一緒にごはん食べようね」って。そこでわたしがお茶碗を割ったりすると、おばさんがお母さんみたいにちゃんと叱る。そういうことが、ごく普通にありました。そのような近所も含めて、家族ではない関係の中で子育てができた環境が、橋谷さんのおっしゃるように本当になくなってしまって、今は子育てがとてつらく大変なものになっていると思います。

**原島** 子育ての基本単位として家族があるのはわかるけれど、昔は家族以外に子育ての仕組みがたくさんあったんですよ。ぼくの小さいときは母親にくっついていて、「おこづかいをあげるから外で遊んでおいで」と言われました。今、外は危ないので、そんなことは言えません。昔は外、つまり地域の中に子育ての仕組みがあったから、自分は忙しいので地域の子育ての場に行きなさいと、親が言えたのですよね。



### ■大事なのは“中途半端”な関わり方

**田中** 家の構造で考えると、昔の家はドアではなく、引き戸ですね。引き戸がおもしろいのは、全開もあり、すべて閉める場合もあり、途中まで開いている場合もあること。長屋はだいたいクーラーがないので、夏は全開です。すると、すぐ近所の人が入ってきて、上がり口に座るんです。ちょうど椅子の高さと同じような床の高さですから。今は床が低くなっているから、家の中に上がり込むか、玄関で立って話すしかないのですが、江戸時代からついこのあいだまで、近所の人が土間の上がり口に座って家の中の人と話をすると、そういう関係がありました。子どもと近所の人がいつもどこかで接触しているので、まさに安

全な顔なじみの関係ができます。

**原島** それがドアになって、中途半端に開いていると危なくて、かつ外から見られるのは嫌だということになるんですね。実は外から見られないようにするのは、セキュリティ上、きわめて危険なんです。塀を作っているようなものですから。泥棒からすれば塀を乗り越えるときは危ないけれど、乗り越えてしまえば、通りから見られなくなるので安全なんです。

**橋谷** わたしの田舎のおばあちゃんの家は農家だったのですが、鍵をかけないので、普通に知らない人が家に入ってきていました。それでも危ないことはなかったのですが、そのほうが安全だというのはわかるような気がします。

**原島** それに縁側もありました。縁側は靴や草履を脱がなくてもよかったですよね。

**田中** そうなんです。“腰掛けて関わる”という中途半端な関わりが、すごく大事です。今は密接になるか疎遠になるかしがなく、それが問題だと思うんです。橋谷さんのおばあちゃんの家は開かれていたけれど、ご自身の家はどうでしたか？

**橋谷** 実家には両親だけが住んでいて、家にいるときは鍵は開けっ放しで、近所のおばちゃんが普通に「こんにちは」と入ってきます。わたしは実家に帰省すると、「危ないから鍵をかけないとだめじゃない」と鍵をかけるのですが、両親は「大丈夫よ」って。わたしの場合は高校生ぐらいから鍵はかけるもの、ドアは閉じるもの、という意識になってきたような気がします。

**原島** ぼくも小さいときは、当たり前のように隣の家に入り浸っていました。今はマンションだと、表札もつけない家も増えていますよね。それはとても危ないと思うのですが、東日本大震災のときに、見直そうという動きがありました。互いに隣の家を知っていると、いざというとき、「あそこに一人暮らしのおばあちゃんがいたぞ、ちゃんと避難したか、ちょっと行ってみよう」ということが可能です。震災の数カ月前にあるマンションで芋煮会が開かれ、そこでみんなが知り合いになれたために、いざというとき非常に役立ったというニュースもありました。

**橋谷** ちょうどその頃、うちのマンションで、何かあったときに住民の安否を確かめられるよう、緊急連絡先の載った全戸の名簿と、“無事ですステッカー”というのを作ったんです。「うちは無事ですよ」とドアの外に貼るステッカーですね。でもやっぱり何戸かからは、名簿に名前や連絡先を載せることに、猛烈な反発がありました。結局、説得してもどうし



ても嫌だという家は載せなかったのですが、そういう試みには、必ず反発があるんですよね。ただやっぱりやっていかないと、いざというときに絶対に困ると思うんです。難しいところなんですけどね。

**原島** 反対する自由もありますからね。みんなと同じようにしなければいけないとなると、しがらみに感じる人もいるだろうし。ところで今日は家族の話ですが、家族の中で重要なのはやっぱり子育てですね。子育ての仕組みがしっかりできていれば、家族は、ある意味で自由になる。今はすべて家族に集中させているから、かえって家族を狭く、「こうでなければいけない」と感じているような気がします。

## ■これからの時代を生き抜くにはたくさんの顔が必要

**橋谷** 息子が小さい頃、家のそばに住んでいるベビーシッターさんにお世話になっていました。仕事でわたしの帰りが遅いときは保育園に迎えに行ってくれて、シッターさんの家で面倒を見てもらってました。それで息子が3歳になった頃、気がついたらわたしの知らないうちに、おむつが取れていたんです。驚いたら、シッターさんが「〇〇ちゃん、ちゃんとトイレができるようになりましたよ」って。ですからわたしは、一度もトイレトレーニングをやっていないんです。今それを考えると、すごくいいコミュニティができていたんだと思います。お母さんがトイレトレーニングをしないのに、おむつが取れるというのは、普通はないですよね。本当にいいシッターさんに巡り合えたと思うんですが、このようなことがいろいろなところであると、すごくいい世の中になると思います。

**田中** それが今は、保育園でということになってしまう。もちろん保育園は必要ですが、すべて保育園まかせというのは、とても不自然な気がしますね。

**原島** その間がたくさんあるはずなのに。

**田中** そう、もっといろいろあってもいいはずでしょう。ベビーシッターさんとのコミュニティでもいいし、先ほど話したように、家の中に知らない人がいてもいいかもしれない。これは「個人」の考え方と関係があるかもしれませんが、個人情報を外に漏らしてはいけない、守りきらなければいけないという圧力が、組織の中ではとても強いんです。犯罪被害から組織や個人を守るためには確かに必要ですが、個人とは何なのかを考えると、“どんな情報も出してはいけない「わたし」”ということに、とても疑問を感じます。講演でも話しましたが、一人の個人の中にはたくさんの「わたし」があって、その「わたし」がいろいろな触手を外に向けて、いろいろな人と関わりをもつことをちゃんと認めなければいけない。柔軟な個人像はもったほうがいいと思います。それをもったとしても、たとえば排斥主義的なことにはならない。外国人に対する排斥主義にはヘイトスピーチなどがあ

りますが、不思議に思うんです。多様な友だちがいたら、こうはならないだろうと。つまり、同じ価値観の人としか友人になれない閉じた人たちなのです。自分の一部分でも異なる背景のある人と何らかの関わりをどこかにもつことで、理解や、先ほど原島先生がおっしゃった共感が生まれるわけですね。すると、人間と人間との共感として感じられるようになるから、国籍や民族は排斥する理由にはならない。今はグローバル化が叫ばれているけれども、グローバル化でとても大事なことは、グローバルに友だちをつくることだと、学生たちにも言っているんです。

**原島** 個人は英語で individual です。in は否定ですから、individual は、「分けられない」という意味ですが、もともと人間は individual ではなく dividual ではないかと思えます。作家の平野啓一郎君が、個人に対して「分人」という言い方をしています。一人の人の中に、分けられるいろんな顔があると。ぼくは「顔学」についても少し勉強していますが、自分にひとつの顔しかない、その顔がだめになったらお手上げです。今、高齢者になっている団塊世代の男性の中には、会社の顔しかもっていない方が多くて、定年を迎えてもう生きていけないとか、自分は何だろうと思ってしまう人が多い。たくさん顔をもっていれば、定年後はこの顔でいこうということができる。これからの時代を生きていくためにはたくさんの顔をもつことが重要だと思いますが、まさに江戸時代がそうだったのですね。

**田中** そういえば、橋谷さんはたくさん顔をもっていますね。わたし、『サンデーモーニング』で一緒にいたときには、橋谷さんは『サンデーモーニング』の顔しかないのかなと思っていたのですが、大学や日本語学校でも教えていらして、お子さんもいらして、いろいろな顔をもっていると思います。

**橋谷** そう言われればそうですね。たとえば友だちも、仕事関係と、ママ友と、わたしは学生時代にバンドをやっていたので、バンド仲間のグループがあるので、仕事で落ち込んだときはママ友やバンド仲間と飲んでわいわい騒ぐとか、違う自分のところに行くとか



とすることはあります。だから先ほどの江戸時代の、一人がいろいろな名前をもつというのは、とてもいいと思います。ただ、今は SNS でアカウントを一人でたくさんもっている人がいて、アカウントごとに暗い自分、明るい自分などの使い分けをしていますね。江戸時代の一人の人がたくさん名前をもっているのと、SNS のアカウントをたくさんもっているのとは、同じようで違って、どう考えたらいいのでしょうか。

**田中** SNS のアカウントをたくさんもっていても、まわりの人は、全部のアカウントが一人のものだということを知りま

せんよね。江戸時代の場合は知っているんですよ。

**原島** あ、それはけっこう重要ですね。匿名ではないわけですね。

**田中** 匿名ではないんです。江戸時代の研究をしている者からすると、一人の人に名前がたくさんあると、同一人物なのかどうかを文献上で判断するのに苦労するのですが、当時はみんな知っていたんです。それがとても大事。お互いにそれを許しているというのかな。

**橋谷** なんだか、江戸時代というのはすごく自由な感じがします。

**田中** でもこのあいだ、橋谷さんが二胡をもっていましてね。二胡って、中国の楽器なんです。バンドをやるだけではなくて、その演奏もしていってらっしゃる。

**橋谷** 演奏なんて……。まだ練習中で、ギコギコです。

**田中** でも、やっぱり橋谷さんのように、女性のほうがいろいろな自分をもちやすいという柔軟性はあるのではないかと思うんですよ。

**原島** 実は 20 年以上前、ぼくは育児研究会に属していました。ぼくは全然育児をしなかったのですが、発表の場では、育児から母親を解放するにはどうしたらいいか、それが育児の本質ではないかという話をしたんです。育児から解放する仕組みをつくっておくと、つまり母親としての顔だけではなく、別の顔をもっていれば、逆に育児をしたいという気になるのではないかと。「あなたは育児をするのが役割です」とまわりから言われてしまうと、育児が苦痛になってきますよね。だから母親がいろいろな顔をもつのは、子育てという観点からも必要だと思います。もちろん最近では「父親も」と言わなければいけないのですが。

**田中** 12 月に法政大学で「アバター for ダイバーシティ」という題名でシンポジウムを行ないます。別の人間を自分の中に発見するということを現代の現象から、精神医学の面も含めて考えてみるつもりなんです。たとえば自閉症の方々が、社会的役割が決まっている人間関係の中ではうまくいかないのに、アバターを使ったとたんにすごく生き生きとして、いろいろな能力を発揮するという研究があるんですね。そういう研究をアメリカで行なっている池上英子さんと一緒にシンポジウムを行なうのですが、実際に、そういうことはあると思います。社会的な役割は大事ですが、その中に閉じ込められていていいの。人間はいろいろな能力をもっているから、社会が変わっていくときにこそ、今の役割だけではない自分の能力を別の方向から発揮してみるというのは、社会のためにもなるはずですよ。それを、もうそろそろ考えなければいけないと思います。

## ■家族を、生きていくためのコミュニティと考える

**原島** ちょっと別の話をしますが、今日の話でもうひとつおもしろかったのは、昔は家族

がひとつの企業体であったということです。でも今は大きく変わってきて、外に働きに出る父親や母親が多い。すると、子どもには親が働いているところが見えず、これは大きな問題だと思っています。子どもは大人を見て育たないといけなのに、今は分離してしまっていて、子どもは働く親のかっこいい姿ではなく、仕事に疲れて帰ってきた見苦しい姿を見ているわけですね。ぼくは情報が専門ですが、情報化社会では、働いている姿が見えるような子育てが可能になっていくかもしれません。パソコンに向かって仕事をするだけなら、家でもできるはずですからね。あるいは、入社する日を月・水・金曜にして、それ以外の日は家で仕事をしてもいいようにするとか。月・水・金組と火・木・土組に分かれて入社すれば、通勤ラッシュも半分になるし。そうした働き方が、これから重要になると思っています。

**田中** 職住が離れてしまったことが江戸時代と近代を分ける、大事な区切り目なんです。たとえば江戸時代の女性たちが誇りをもっていた仕事のひとつが、機織りです。機織りは家の中で行なっていましたが、工場生産が始まってからは工場に集約されました。野麦峠の話のように、工場に集められた女性たちは長時間労働です。ラインがあるので人を集め、効率的に働かせていたわけですが、原島先生もおっしゃるように、本当はいろいろな場所で働ける今でも、同じ働き方をしています。これが、働き方改革がうまくいかないひとつの理由です。

それから、農業や漁業、林業などがなくなってきたのも、大きな理由ですね。これらはどんな時代であろうと、家と仕事が一体化していないとできないので、家族と一緒に働くことになりましたが、それもなくなってきています。そういう社会の中で、新しい職住近接型とか職住一致型の働き方というのが生み出せたら、家族は変わります。家族は家族の問題としてだけで考えるのではなくて、働き方や社会の問題と一緒に考えなければいけない気がします。

**原島** 家族がおじいさんやおばあさんと離れてしまったことも大きいですね。これは前回の山極先生の分野の話ですが、ホモ・サピエンスからお年寄りが生き残るようになったのです。ほとんどの動物は、生殖ができなくなったら死んでいく。ところがホモ・サピエンスは違って、おばあさんは早く閉経をして自分が産めなくなる代わりに若い人を助けるといった戦略を立て、それが大成功を収めました。おじいさんも村の長老のように、文化を伝承するという役割を担った。ところが今のおじいさんやおばあさんは助けられる側に回ってしまって、助ける側という意識が薄くなってきた。非常にもったいない気がします。

**橋谷** 最近よく聞くのが、幼児の「幼」と老人の「老」を合わせた「幼老院」という言葉です。血縁関係のないおじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちを育てて、逆に子どもたちから

元気をもらう。そうした施設がうまくいっているというニュースを、時々見かけます。

**原島** 幼稚園の「幼」と老人ホームの「老」を一緒にするわけですね。

**橋谷** それは、先ほどから優子先生がおっしゃっている、血縁じゃないコミュニティのうまくいっている例だと思います。おばあちゃんやおじいちゃんは、やっぱりものすごく知恵もあるし、今のお年寄りも元気だし、介護される側や、いたわられる側ではない活躍の仕方が絶対あるはず。それをうまく生かしてコミュニティをつくれれば現代版の連ができるのではないかと考えて、少し希望が見えたような気がします。

**原島** 幼稚園の隣に老人介護施設があると、いいんですよ。実は子どもにとっていちばんいいのは、人間は死ぬものだを教える教育です。死を身近に感じ、悲しみを乗り越えていくことで、子どもは成長していきます。今はそういう機会がなくなっていますね。

**田中** おじいちゃんやおばあちゃんから自分を引き離して東京に出てこないと言わなくなると仕事ができなくなったということも、大きな問題ですね。この問題は、まだまだ続くと思います。わたしは、地方から出てきて東京の大学で育った学生には、本当は地方に戻ってほしいんです。Uターンすれば、両親と一緒に暮らし、そこで結婚して子どもを産むという循環ができます。ですから、Uターンを希望する学生たちの力になってあげてほしいということ、いろいろな場所で話します。すると、卒業生たちも最初は意欲を見せてくれるんですが、現実には地方には働く場所がないという話になってしまう。これも課題ですね。

**原島** 過疎化や限界集落という厳しい状況がある地方でこそ、都会にはないコミュニティをつくることで魅力を高めていくことができるかもしれませんね。連のようなものをつくるにしても、都会では、隣の家を説得するだけで疲れてしまうような部分もありますし。

**橋谷** 先ほど優子先生がおっしゃったLGBTの家族、必ずしも男性と女性が結婚して子どもを産んで家庭をつくらなくてもいいというお話が、とても印象に残りました。そうなったら、世の中はとっても自由になると。同時に思い出したのですが、『万引き家族』という映画はご覧になりましたか？ 複雑な家族関係と絆を描いた物語でしたが、あのような絆もありなのかなと思いました。

**原島** 家族を小さく考えてしまうと子どもをつくることだけが目的になってしまって、それが義務になる。そうではなくてもっと広く自由に考えるようになれば、逆に子どもをつくりたいと思うようになると思うし、子育ての新しい仕組みが出てくるという気がします。





**田中** 子どもを産まない理由のひとつが、教育費の高さです。OECD 諸国の中で、日本は国家予算を教育費にあてる率がとても低いので、確かに教育費は高く大変なんです。でも家族が多くて働いている人が多ければ、一人の子どもの教育費を分担して負担できるかもしれません。LGBT じゃなくても、つまり、同性どうして性的関係がなくても、恋愛関係じゃなくてもよくて、いろいろな関係が可能です。家族どうしても気の合わない人がいるように、他人どうしなら、なおさら気が合わない人もいるかもしれないけれど、江戸時代のように企業体、生きていくために必要なコミュニティだと考えれば、自分と同じような考え方をもっていなくてもいいと思うんです。

**原島** お時間が残念ながらあと1分になりました。橋谷さん、最後におっしゃりたいことを。

**橋谷** 先日新聞で読んだのですが、歳を取って不安になった独身女性が、同じような境遇の人たちでグループをつくって一緒にお墓を買いに行ったり、ひとつの屋根の下で暮らすという形も出てきているようなんです。梓を取り払うと、世の中がどんどんよくなるような気がして、今日はなんだかすごく明るい気分になりました。

**原島** ありがとうございます。今日は、まとめるつもりはありません。これはみんなで一緒に考えていこうということで、終わりにしたいと思っております。本日は本当にありがとうございました。



#### パネリスト

橋谷 能理子 (フリーキャスター・コミュニケーション講師・日本語講師)

1961年、香川県に生まれる。東京女子大学文学部卒。テレビ静岡でアナウンサーをした後、フリーに。テレビ朝日『ニュースステーション』でアシスタントキャスターを務め、テレビ、ラジオの報道、情報番組などで活躍する。キャスター、主婦、そして1児の母としての、多角的な視点と感性から生まれる意見には定評がある。現在はTBS『サンデーモーニング』に出演中。「日本語」を使う仕事の経験を生かし、外国人留学校で日本語講師としての活動も行なったり、コミュニケーション講師として東京女子大学非常勤講師、立教大学兼任講師としても教鞭を執る。



#### コーディネーター

原島 博 (東京大学名誉教授)

1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人とのコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心をもってきた。その一つとして、人の顔にも興味をもち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心をもち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞(Gマーク)審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、2015年12月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。公益財団法人花王芸術・科学財団 評議員。

(撮影：中村 年孝)

#### 公開シンポジウム

「これからの家族を考える」シリーズ第3回

発行 公益財団法人 花王芸術・科学財団

〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町1-14-10 (花王ビル内)

Tel : 03-3660-7055 Fax : 03-3660-7994

編集 公益財団法人 花王芸術・科学財団 事務局

発行日 2019年2月1日